

坂本竹次郎と流送

【石川県小松市滝ヶ原町郷土の偉人】

石川県 花木幹史

2015. 09. 10

坂本竹次郎と流送



坂本竹次郎の石像

目 次

第一章 坂本竹次郎と流送 1	集落の形成 20
小松市の偉人 1	山火事の延焼防止に活躍 . . . 21
坂本竹次郎の生立 1	沙流事業地の各山 21
竹次郎の渡道 1	十勝への進出 22
兄を頼って柚夫に 1	王子御三家 24
坂本造材部の設立 2	風水害の被害と業務の縮小 . 25
まるたけの始まり 2	十勝の流送が一時中断 . . . 26
竹次郎の結婚 3	終戦を終えて 26
事業の拡大 3	坂本木材株式会社の創立 . . 27
中国進出の夢破れる 3	流送事業が困難に 28
竹次郎を支えた人々 4	風倒木被害の処理 28
坂本竹次郎に関する逸話	山林事業の機械化 29
逸話その1 「熊」 4	放流事業の終焉 29
逸話その2 「竹次郎翁と料亭鴨川」 5	巨星墮つ 29
逸話その3 「屋号と社章」 6	巨星なき後の新体制 29
逸話その4 「王子のエライ人」 6	新社屋への移転 29
逸話その5 「印半纏」 7	多角経営 30
坂本竹次郎天寿を全うする . 9	第三章 流送 32
日高村から顕彰 10	北海道山林史 32
滝ヶ原町の歴史 11	新門別町史 中巻 35
丸竹さん 12	新門別町史 下巻 36
流送発祥の地を訪ねて . . 13	造材・搬出 36
流送に関する資料を求めて 15	伐採 36
沙流川を見てみたい . . . 16	搬出 37
第二章 坂本木材のあゆみ 18	伐出事業とは 38
坂本造材部の設立 18	目で見ると往時の伐出・流送写真 41～58
王子製紙との出会い 18	あとがき 60
王子製紙との初仕事 18	
専属伐出請負業者に指名される 18	
岡春部の沢に斧入る 19	

第一章 坂本竹次郎と流送

小松市の偉人

小松市滝ヶ原には明治時代に北海道へ単身で渡道し、未開の奥地で木材を伐採し、川の支流を堰き止めて、集めた木材を一挙に本流に流しました。

いわば「流送」という手法で苫小牧の王子製紙の請負人として一代で財をなし、故郷の滝ヶ原に多大な寄贈をした坂本竹次郎である

坂本竹次郎の生立ち

坂本兵四郎と母よのとの間には常吉、竹次郎、平左門の3人の子供があったと滝ヶ原史には記載されています。

竹次郎は明治4年（1871年）3月7日 石川県江沼郡那谷村字滝ヶ原タ4番甲地三ツ屋で次男として生まれた。

しかし、「坂本木材100年史」の中で竹次郎は4男として生まれたとなっています。こちらの調査で判別できる材料もないので、「滝ヶ原郷土史」と「坂本木材百年のあゆみ」の両方を記載しています。

滝ヶ原地域は山間僻地にて主な産業もなく僅かな田畑や山仕事や石切り場での作業で糊口を賅っていたと思われます。

父、坂本兵四郎は藤次郎の次男として本家から分家していました。

そのため長男の常吉は仕事を求めて北海道千歳郡漁村番外地に移住したと滝ヶ原郷土史で記載されています。

以下は「坂本木材百年のあゆみ」から抜粋し転載します。

坂本竹次郎は明治4年3月7日、石川県江沼郡那谷村字滝ヶ原タ4番地甲地三ツ屋の坂本家の4男として生まれた。

父は坂本兵四郎、母はヨノで実直であったが、いわば水飲み百姓であり、その頃の大部分がそうであったように生活はまことに苦しかった。

このような生活の中での4男坊は当然のことながら自分の途は自分で切り拓くというのが定めであった。

竹次郎の渡道

竹次郎は16才で郷里を出て各所で仕事をしていましたが、明治23年10月7日数え年の20歳で兄の與左門を頼って北海道へ渡道しました。

当時の北海道は人口36万人ばかり、陸軍少将永山武四郎が二代目長官」として屯田兵

制度の見直しや、北海道移民の受入れを積極的に行っている時期であり、明治維新の変動によって没落した士族及びその影響を受けた農民を中心に北海道への移民の数は急増していた。

このような時流が一人の若者の心を動かしのかもしれない。

当時の竹次郎の覚書をみると、「当日は金沢で一泊。翌 8 日は伏木港に一泊。明けて 9 日の夕方、日本郵船会社の熊本丸に乗船、20 日の朝 9 時頃小樽港に到着した。

この時の船賃は 7 円、財布の中には銭別の残りが 60 銭あった」と記されています。

兄を頼って杣夫に

早速、千歳郡漁村番外地の兄與左門方に寄留し、その年の冬から杣夫（そまふ：木こりの意）として千歳の山林に挑み、性来頑強で実直なところから石狩地区の造林業渡辺彦太郎の麾下となって「百石杣夫」の異名をとどろかせた。

坂本造材部の設立

その後、たゆまぬ努力が世人の信用を受けて明治 28 年、札幌大通西一丁目に於いて〔金+亅〕（かねほん）（金の文字の右側にカギカッコが付いた屋号）坂本造材部を創業経営することとなった。竹次郎 24 歳のときである。

時あたかも日清戦争の勝利で日本中が好景気で沸返っていた時でもあります。

更にこの年には小樽、手宮で 700 戸を焼く大火もあり、木材の需要も一気に高まっていました。

坂本造材部という会社は一人親方的な零細企業でしたが、25 才の若者は希望に燃え意気軒昂たるものがあつた。

まるたけの始まり

後日、屋号を㊦（まるたけ）と改める際、知人が当初の「かねほん」の屋号の由来を尋ねると、「郷里で盛業の商家にあやかるため、その屋号を借りたが何とか軌道に乗ったので、これから自前の屋号で頑張るのだ」とその決意の程を披瀝したという。

いずれにしても創業の頃はそう甘いものではなく、高利な事業資金の遣り繰りに辛酸をなめたともいう。

その後、千歳御料材の伐採に着手したのを手始めに明治 31 年には空知川の流送事業、三井物産の造材下請にも携わった。

この年、石狩川、夕張川、空知川は未曾有の集中豪雨によって大氾濫を起こし、空知管

内で 104 人の死者を出すという惨事となったが、竹次郎は幸運にもかろうじてこの難を逃れたという。

竹次郎の結婚

明治 32 年 7 月、28 才で当時石狩郡當別村渋谷甚助の養女で長岡トヨ 19 才と結婚する。

明治 35 年一子女をもうけ、北海道に骨を埋める決意は益々堅く、その事業の旺盛さは本業の木材業の外、硫黄鉱山、船舶業、証券業、或は山林業にまで及んだ。



事業の拡大

明治 32 年 2 月 10 日、日本はロシアに宣戦を布告。

明治 34 年に設立された工場は 96 社であったが明治 38 年には 258 社にまで増えたのである。

このうち主なものとして富士製紙会社の道内進出があり、竹次郎はこの間、三井物産の請負とともに富士製紙の請負人としても、上川、空知、石狩へと徐々にではあるが業容を拡大していた。

中国進出の夢破れる

支那山東省（現在の中国）まで木材を輸出して一旗あげようとしたこともあった。

その当時を振り返って、「私が血気旺りの 36 才の頃、木材を船に満載し、小樽港を出港し（この時の船は小樽板谷富吉氏の伊弥彦丸）支那にて販売すべく天津に行きましたが思うようにならず大失敗をしました。

そのため天津でいままで喫っておりました煙草をやめることを覚悟し、喫煙した積もり貯金を毎日始め、現在に及んでおり、これは私の一生の積立とする考えです」と述懐している。

尚、渡航中の長い間、留守を守って事業の采配をとり、後日かくある下地を培ったのは、賢妻の誉れ高いトヨ女である。

その後、明治 42 年沙流川上流に伐出の斧を振り、翌 43 年には雪解けの融雪期の川水を溜め、木材と一挙に放流し、沙流川での流送が始まったのです。

坂本造材部では、大正 2 年には夕張地区、さらに大正 3 年には陸別地区の訓根根別で数年間、毎年 5 万石程度。同 4 年には十勝の斗満、美里地区へ。

翌5年には足寄、音更の伐出、流送事業」にも王子製紙請負人として進出した。
この間釧路国、厚岸地区にも進出したと伝えられているが、その実績は定かではない。
何れにしても大正初期の頃には、王子製紙一等請負人として坂本竹次郎」の名があちら
こちらの事業地で散見され、その活躍振りにはめざましいものがあり、その行動範囲も
急激に拡大していったのである。

坂本木材の発展については次章での「坂本木材の歩み」で紹介しています。

竹次郎を支えた人々

沙流川、美里別川の二大事業地では、各現場で大勢の労務者を擁し、地元の官民各位の
絶大な協力の下でそれぞれの現場から有能な山頭を生んだのである。

親子三代に亘って労力を提供し坂本造材部と共に生きた献身的な人々を忘れてはなら
ない。

既にもう故人となられた方も多いが、山下暲也氏（大正2年入店）坂本弥市氏（大正8
年入店）、池上清市氏（大正12年入店）を始め、功労ある諸先輩に大帳場の白谷文造氏
をはじめ上田福太郎、中村槌三郎、氏家守信氏、平塚次郎氏、畑中重兵衛、笹野仲衛門
氏、（元王子製紙苫小牧工場山林部受渡課長で故笹野定吉氏の厳父）、坂本與左門（創業
者坂本竹次郎の実兄）の諸氏。

坂本竹次郎に関する逸話

逸話その1 「熊」

造材の現場は山奥ということもあり、熊に関する話は枚挙に暇がないなかで、歩いていて熊と
バッタリということはザラで、素手で小熊2頭
を生け捕り。

村田銃で大熊を一発で仕留める。

作業中に熊が空から降ってきた（?）

熊に追われ、その鼻息が首筋にフーッ。

中々臨場感あふれるものばかりである。

そんな中で、毛利良雄先輩が体験した話で「熊
が餌として倒した鹿の胴っ腹に片足を突っ込ん
だ」というのは圧巻である。



現場の休みに溪流釣りを楽しんでいた。

その時、川向に黒い影。四つん這でこちらを睨んでいる熊の目とバッチリ。その時、少しも慌てず騒がず、その熊の目を睨みながら少しづつ後退り。その時右足がなにか柔らかいものをグチャッ。ひょっと見たらそれは鹿の死骸で、熊が食い散らしたその胴っ腹に足を突っ込んでいたとのこと。

熊は己のご馳走の張り番をしていたのかも(?)。頭から血の気がスウーッと引いて、全身総毛立ち。あとはもう一目散に2キロの山道を飯場まで戻り、無事難を逃れた次第。毛利さんその時の感触が40有余年経った今でも、右足裏に鮮明に残っていると。

逸話その2 竹次郎翁と料亭鴨川

創業者坂本竹次郎が料亭鴨川のオーナーだったことは、知る人ぞ知る稀事である。

この料亭は、札幌のど真ん中を流れる鴨々川の畔に位置し当時、札幌でも超一流の折り紙付きのものであった由。

当時の本社は、この料亭鴨川と隣接しており、その通用門は熊本城の石垣を模したとかで、堅牢にしてその曲線は清麗、周囲を押し堂々たるものであったとか。

料亭鴨川との境界には石川産の軟石が巡らされ、その一隅には往来自在な秘密の潜り戸が、そこから庭に足を踏み入れると、名のある庭師の作になる、築山からは滝が落ち、池には200余匹の錦鯉。葉音、水音、三味の音とまさに桃源の世界。

ここに誘われた誘客はみな感激の面持ちであったとか。いかに趣味とはいえ、並みの者ではなし得ない快挙、快事。艶福家としてもその名を馳せた翁ならではの面目躍如。

そんな翁の生活信条に、三度の飯は麦飯というのがあり、これと、暫し自我を忘れ桃源に遊ぶ翁の落差の大きさに驚きも。

快潤メリハリのきいた翁のスケールの大きさが浮かび上がってくる。傑出した人物とはまさにこういうご仁を云うのかも。妙に納得。



逸話その3 「屋号と社章」

今でも時折、多くの人に親しまれた㊦の屋号に因んで、「まるたけ」さんと呼ばれることがある。そんな時なぜか心が和むのは良き時代への郷愁か。



この屋号も最初は坂本の本をベースにした本「これで「かねほん」と呼んでいたとか。この「かねほん」は竹次郎翁の郷里の大店のものであり、それにあやかっただという話もある。

現在は屋号といった特別の定めはないが、極印等に使用されている㊦は、創業者竹次郎翁が明治32年7月結婚を機に、心機一転、名前の一時「竹」とその当時札幌で一番の賑わいをみせていた、乾物屋さんの屋号㊦にこれ又あやかっただものとか。

その昔、幹部社員のみ与えられたといわれる社章が今も一個残されている。形状は円形、直径1.5センチ、厚さ一ミリ、地金は純銀で、屋号の㊦は純金で中央に供え盛り、その周囲には時代を映す日章旗を施し、その時計回りに王子製紙専属の八文字が誇らしげに浮き彫りにされている。



これを襟にした往時の社員諸君の心意気やいかに。その情熱が伝わってくるようだ。

時代は下って昭和32年、日本が国連加盟もなり、世の中みな上昇志向。新社章制定の機運高まり、その意匠を社内で募集した。富士元光夫氏の作品が採用となった。

この頃、横文字使用が一つの流行、新社章も坂本のイニシャルSをデザイン化。その周りを4本の節太竹で囲んだもの。云うまでもなくこの4本の竹の意味する所は、竹次郎翁の人柄をしのび、決断、果敢、実行そして情け、これがあまねく全社を包むようにとの願いを込めたと聞く。



屋号、社章というものは、いつの時代でもそこに集う人々の思いが凝縮される。

逸話その4 「王子のエライ人」

日常的には王子の方々とは、各セッションにおいて緊密な連携のもと仕事を進めているが、そんな中で王子のエライの方々のご視察をいただくこともある。それも超エライの方々である。

古い記録によれば、王子製紙のみならず我が国の製紙王として、明治、大正、昭和の三代にわたり、大きな足跡を残された藤原銀次郎翁のご視察は、大正12年十勝国美里別川事業地であった。

藤原社長他随員一行は芽登までは車でお越しになったが、その先が大変でデコボコ道を直し、ぬかるみには何千本もの小丸太を敷くなどして、準備に大奮であった。エライ

人を迎える現場の緊張ぶりが伝わってくる。

故老が伝える話によると、藤原社長は現場をご視察し、現場員にも親しく声を掛け殊の他ご機嫌麗しく、王子、坂本の社員には3円、労務者にも1円のご祝儀を弾んで由。又、直接お声をいただいた者はそりやもう感激の極みで、末代までもその誉れを語り継いだとのことである。

田中文雄社長には山林事業には特にご精通ということもあって、ご来道の折りなどスケジュールを差し繰り、数次にわたるご視察をいただき、幾多のご助言を賜っている。

田中社長にはお人柄そのままに誠に気さくなお方で、居合わせた現場責任者と予定外にお食事をご一緒されるなど、その者をしていただく感激された。などと云う今まであまり知られていなかったことなどが、この度その当事者より誇らしげに披露されたりもしている。

市村修平社長には、苫小牧工場時代から、それこそ実務的な面に至るまで、種々ご教導と、当社の監査役としても、昭和40年から3年間ご就任いただいている。

市村社長にも繁く現場へのご足労を煩わし、その卓越せる識見と大胆緻密な発想から幹部や一般社員を問わず、多くの示唆に富んだお話をいただいたことも忘れ難いことである。



現場をご視察では、作業員にまでも気配りをみせ、その一方で核心に迫る鋭いご質問をなさるなど、随行者の者はいつも緊張の連続だったと先輩諸兄は往時を述懐している。以上、三社長の例に見るまでもなく、この他にも多くのエライ方々のご視察を仰いでいるが、エライ方々はみな一様に、その人間性豊かな魅力をもって、フェロモン効果現象(?)を引き起こし、そこに関わる者を魅了、ズバリはまった言葉が見つからないが、やや大袈裟に云えば、エライ人にお会いできたという誇りというか、満足というか、至福の思いを強めていたのかも知れない。

逸話その5 「印半纏」

昭和15・6年頃のセピア色に染まった一葉の写真。

そこには○竹坂本木材の印半纏をビシッときめ、若者が一人誇らしげに澄ましこんでいる。

当時この印半纏に一種のステータスシンボルを感じ、粋に着こなして闊歩。

印半纏には通称、青、赤、平の三種類があり、今でいう職種別に厳格な着用基準が守られていたという。

青半纏は組頭。襟元の○竹屋号と裾周りの小路割模様が青色の染抜き。布地の色は深みのある鉄紺。

これらは原則として反物で支給され、各自縫製仕立てに凝り、裏地にお洒落を競ったともいう。



赤半纏は小頭用のもの。屋号を赤色で染色。裾の小路割は白抜きである。

それに一般用の平半纏。布地の地色鉄紺そのままに、屋号、小路割ともに白抜き。

これは最低三シーズン努めなければ貰えなかったとのこと。

裾に配された小路割文様は「坂」の一字をデザインし、戦前は仙台の青山染店、戦後は札幌の中村染店からそれぞれ調達していた。

この印半纏は昭和 37 年の支給が最後で、それからはお馴染みのジャンパースタイルのワーキングウェアに変わっていった。

往時を懐かしむ人は「この半纏さえ着ていれば、どこでもフリーパス。たいしたもんさあ。それでこれを貰ったとき、嬉しくて鼻高々、写真屋へ行ったりして、そりゃー大変だったよ」

どうやら冒頭の一葉も、そんな強い思い出がギッシリ詰まった、良き時代の貴重な写真のようである。

坂本竹次郎天寿を全うする

昭和 35 年 2 月 16 日、創業者で坂本木材社長の坂本竹次郎は 90 才の天寿を全うしてその生涯を終えた。

葬儀は東本願寺札幌寺院で執り行われ葬儀委員長は王子製紙工業常務取締役の山本茂朗氏、僧侶 29 名による執儀という盛大なものであった。

法名は「大乘院釈専応」であった。

王子製紙工業専務取締役苦小牧工場早川昇氏他多数の弔辞があったが、同郷の後輩で特に親しくしていた元北海道石川県人会連合会会長の吉中新次郎氏は、竹次郎について次のように語っている。

「鴨川も数年がかりで完成し自慢の庭でした。離れだけでも 5 つ位あり風呂場のタイルの壁は東海道五十三次の絵でした。

始めのころ、事業に苦勞した時代もあったようで遠藤石太郎という高利貸から資金を借りていたということですが、竹次郎さんが中々の人物であったので、その高利貸からも大変可愛がられていたそうです。一時株を盛んにやっていましたが、結果は失敗でそのため株を嫌っておりました。

仕事上では道具の後始末と掃除に対してやかましく、従業員と一緒に鮭を食べに行ったりするときなどには、醤油を余分に皿に入れたりすると、その場で物を無駄にするな、注意をして教育しておりました」

坂本家には今でも竹次郎の遺訓が掲げられているという。

「いつまでもあるとおもふな おやとかね
ないとおもふな うんといのち
おやこでも かねとはんとは かすなかれ
かすとおもわば くれてやるべし

竹次郎 吟」



僧侶29名の読経が荘厳さを増した葬儀



竹次郎肖像に規外道人が讚を記す
(昭和7年晩秋)

日高村から顕彰

なお、日高村はその開基 50 周年に当って、長年に亘り村民との信頼関係を築き、村の開発発展に著しい貢献をしたとのことで坂本竹次郎を日高村開発功労者に指名表彰をしている。

ここで坂本竹次郎の郷里である滝ヶ原について述べておきたい

滝ヶ原町の歴史

明治 22 年(1889 年) 4 月 1 日 市制町村制施行で、当時の那谷村，菩提村，滝ヶ原村を合併し江沼郡 那谷村となりました。

昭和 30 年 (1955 年) 4 月 1 日これまでの 江沼郡 矢田野村，那谷村，月津村の一部，能美郡 中海村を小松市に編入しました。

さらに昭和 31 年 (1956 年) 9 月 30 日、能美郡 金野村，西尾村，新丸村，大杉谷村，国府村の一部を小松市に編入し現在の小松市となりました。

滝ヶ原町は古くは石切場として栄えていましたが、外国産の需要増に伴い次第に衰退し、現在は数社となっているようです。

滝ヶ原石は凝灰岩で、石塀や土台石などに使用されてきました。

金沢城の外濠の石積にも使われているそうです。

坂本竹次郎が生まれ育った滝ヶ原は石川県小松市から直線で約 12 キロ南側にあり、那谷寺のある那谷町や加賀市に隣接した山間の集落です。

